ル 3
3368
4

和朝名勝畫圖巻之四目録

箕面瀧
難波江
鈴鹿関
昆陽池
詩圖
嵐山
詩圖
廣澤池
詩圖
青柳橋
詩圖
小揺の磯
詩圖
三方原
か茂川
小倉山
矢矧川

ル3
號 3368
巻 4

早稲田大學圖書館
昭27.3.5
藏書

吉野瀧 大和
紀友則
三吉野の
よしのゝ瀧に
浮ひいつる
泡(あハ)をか
玉の
きゆと
みつらん

青柳橋
読人しらず
ゆく
より
青柳の
橋

難波江
前内大臣
難波江のあしかり小舟ゆきかへる
うき
せんとや

相公看楓

楓林暴春　白雲層

山色霜餘氣象増

紅葉忽經台覧後

滿廊不掃夕陽僧

ゆふべハ白雲のたく層なる下よおほふよ

つまもてなす寺がた

あらざる霜のちるよ

山がんとはふそし山を

も一入まさりける

かそはおん試

相公御覧しそ

らりはらく風勢

が出来てそ寺

常のおなかの梢

よハ思ひれぬそ

さかりとそ廊

下よ落ちれ

おほを御示よ寺

僧たちは

のらう

ぬえと

なり

鈴鹿関（すゞかのせき） 伊勢
権中納言定家卿

とゝめおくる
こゝろや鈴鹿の
関ならむ
振捨（ふりすて）かゝれ
花の散（ち）ぬれ

小総磯（こゆるぎのいそ） 相模

読人しらず

浦（うら）風の吹まさるらし

小ゆるぎの

磯の波まに

千鳥鳴（なく）なり

まのゝ池 摂津
後鳥羽院
露しらふ
まのゝ小萱の
萱海ら
からしもおきて
絶ぬすゝむし

忠義兵　杜子川

白布長衫皂校條
腰間百箭臂双刀
帰来酣飲咸陽市
換得殷紅錦戦袍

詩乃心ハ白布にて長とと衫をして絹よろふろ紐之袍百戦功成て凱陣せしときさせん意気あらしきびしさの余り咸陽の市に行き酒を飲んとて其酒代すし錦乃きぬきを酒乃代りよつかうし酒をのミて乃むその詩ハ忠臣と天乃てんかつくろをいさむるうたなり

浣華酔帰　九渕

蕭々詩鬂似秋蓬
無酒憂懐何以融
日暮帰時花挾路
海棠不入酔吟中

詩の心ハ唐朝乱れて国家乃治まらざるを憂ゆるよ髪も鬢も秋乃よもぎのごとくなるをなくさめんと酒を呑日暮に浣華渓を帰るそ秋花錦乃ごとく咲乱れたるが詩料に大分なれども海棠ハ母乃名なれば除きて詩に吟せぬぞ酔中なれども詩人ハちかしも孝心をそなへたる殊勝の詩也

三瓱原（みかのはら） 山城
年豆豊

ちらと
まちえ
こされ
きり
えらしの
御酒（みき）が

原と
かすみん
ころ
ぬり

嵐山
峰の白雲

かも川　山城

前右兵衛督為成

山藍(やまあゐ)の袖の月かけ小夜更て霜吹かへすか茂の川風

題開聖寺　李渉

宿雨初收草木濃
群鴉飛散下堂鐘
長廊無事僧帰院
盡日門前獨對松

此ハ一夜雨が降りて快く晴けるぞ草木のいろも弥まして青くとりわけ見事なる景色に開聖寺に詣でられバ時しも

鐘楼堂のかねのなりたるハ樹木に宿りし鴉などもおどろきさハぎて飛散するぞ僧さらも乞食のうちなれど詠院へかへりまかへりてこそ李渉ハ門前に終日松をながめてこゝろをなぐさめしとぞ詩かな

小倉山 山城 紀貫之

夕月夜小倉の山になくしかの

こゑのうちにや秋はくるらん

菱田池 大和

待賢門院
安藝

ゑ
さなれを
すかつの

池は
水草ゐし
すゑまて
ゆきかひ
なかしきて
花
あれ

野洲川　名

匡房卿

万代と
三上の山の
ひゞくには
野洲の
河水すみそ
なる
か
な

江村即時　司空曙

罷釣帰來不繫舟

江村月落正堪眠

縱然一夜風吹去

只在芦花浅水邊

釣をやめ八宵より釣をやめて居るうち月乃入方に釣を止て舟をつなぎもせずして舟中に寝ころびて舟をつなぎとしても吹きつけ風の夜吹

すゞしかりけり なりともたとへ吹きともあまりの風にて八有まじ芦華浅水乃邊より外へ八吹やるましと心安く寝ころびしかり 漁人自得の分野となりしと也

鳧を畫て鶩に類し虎を摸して犬
に肖るは美醜の筆をそゝぐ圖本ならん
ますあらむ漱長名所の畫凡六十八勝
これ入魂の毫勢かまへは小子學繪れ
規矩むしろ此書を魁とせむ

都　昇仙亭鶴翁誌

書圖撰著　承議郎金吾校尉漱石子

扶桑畫譜　前篇 後篇　全部十冊　橘有税子 守國畫圖　追而板行

和漢物　仙人　源氏繪　文字　草木
禽獣　宗画　名山　勝地　屏風
神仏　津の道　武者　詩歌　花鳥

右悉此書有

享保第十七壬子稔青陽花朝日　彫工　丹羽平左衛門

京師書鋪　堀川高辻上ル町　植村藤右衛門壽梓
東都書坊　通石町三町目　植村藤三郎
大坂書坊　高麗橋壹町目　植村藤三郎